

文京学院大学 オピニオンレター

現代アメリカにおけるバイブル・イシュー —翻訳刊行に寄せて—

提言者: 鶴浦 裕 (外国語学部教授 専門: アメリカ政治)



文学博士。主な研究テーマは現代アメリカ政治・社会問題。ハーバード大学、カリフォルニア大学バークレイ校、ジョージタウン大学などで客員研究員。著書に、『進化論を拒む人々—現代アメリカにおける創造論運動』(勁草書房、1998年)、『チャーター・スクール アメリカ公教育における独立運動』(勁草書房、2001年)、『現代アメリカのガン・ポリティクス』(東信堂、2016年)など。2017年12月20日には、『E.スコット著 聖書と科学のカルチャー・ウォー—概説 アメリカの「創造vs生物進化」論争』(東信堂、井上徹<本学大学院卒>共訳)を上梓。

トランプ政権の下で迎える
初めてのクリスマス

12月の声を聞くと日本でもクリスマス・ソングが流れ、ツリーやイルミネーションが通りを飾り、街の景色はいっせいに華やぎ、秋の物淋しさから一変します。アメリカではとくにトランプ大統領の下で初めてのクリスマスを迎えることもあり、この時期、例年より高めの関心を持たれています。

かつてはキリスト誕生の飾りが民家の庭だけでなく公園にも置かれ、公共の交通機関でも”Merry Christmas”の文字やロゴのステッカーが当然のように貼られていました。しかし非キリスト教徒の数も増え宗教的に多様化したこの社会では、これまでのように国じゅうをクリスマス一色に彩る習慣は影を潜めつつあります。そういえば、友人からいただくカードの挨拶もいつからか”Season’s Greeting”に変わっています。

ここに宗教的多様化にふさわしい「ポリティカル・コレクトネス」を模索するアメリカの姿を見ることができそうですが、その変化の背景には、民主党などリベラルな人たちの運動やCNNや『ニューヨーク・タイムズ』などそれを支えるメディアの報道があります。彼らは自由、平等、科学などの近代主義に基づいて、キリスト教の伝統的な価値観の押し付けを政治的に正しいとは考えないからです。

しかし他方では、この流れに不安や怒りを掻き立てられ、「古き良き時代」に戻りたいと考える、一部のキリスト教徒がいます。彼らの思いは共和党保守派の政治家に吸い上げられFOX NEWSでもはやされながら、年々、強くなっています。そしてまさにその中心にいるのがトランプです。彼は選

挙運動中から「再び“Merry Christmas”と言えるアメリカ」を公約の一つにして、このようなキリスト教徒を自分の支持基盤に組み込んできました。

「ウォー・オン・クリスマス」はリベラル派に対するまさに宣戦布告となっています。

このように今日のアメリカでは、キリスト教の伝統的な価値観の継続を主張する保守派キリスト教徒と自由・平等や科学など近代的な価値観の尊重を主張するリベラル派の人たちが激しくぶつかっているのです。

バイブル・イシューとしての
「創造vs生物進化」論争

こうした衝突に含まれるイシュー(争点)はいろいろですが、とくに保守派キリスト教徒は主張の根拠を聖書に求めるため、まとめてバイブル・イシューと呼ばれることがあります。具体的には避妊・人工中絶、安楽死、死刑、性的マイノリティ、ポルノなど善悪の判断にかかわる事柄が多く、そもそも解決の難しい事柄ばかりです。

そしてこのバイブル・イシューのなかで最も典型的なものが、「創造vs生物進化」論争です。旧約聖書の『創世記』によると、「光よ、あれ」という第一日目の言葉から始めて、神は、第二日目に空と海を、第三日目に陸地と植物を、第四日目に太陽、月、星を、第五日目に魚と鳥を、第六日目に陸上の動物と人を創造し、第七日目に休息したと書かれています。神は宇宙や地球の生物を別々に現在の姿形に創造した、その創造は今から一万年以内であり、創造以後、生物は変化していないといえます。これを創造論と言いま

一部の保守派キリスト教徒は神による創造を事実として受け容れ、1920年代に創造論を否定する生物進化論の教育を公立校で禁止しようとしてきました。続いて1970年代に創造論を「科学」として公教育に持ち込もうとしてきました。しかし結局いずれの場合も、科学教育を重視する人たちの反対にあい、司法対決で敗北を喫しました。

この歴史を大雑把に区分するならば、一方で20世紀半ば過ぎまでは一部の保守派キリスト教徒は圧倒的多数派として創造論を州法として立法化しようとした時代です。しかし連邦最高裁が政教分離の原則に基づいて彼らの試みに対して違憲判決を下しています。他方で20世紀末からは、彼らは最高裁判決に怯むことなく戦術を変え、生物進化論の批判を公教育に導入しようとする時期が始まって今日に至っています。しかも少数派として信仰の自由を根拠としながらそうしているのです。このような戦術変化に対し、連邦最高裁は今後どのような判決を下していくのでしょうか。その判断はこれからです。

このたび刊行した翻訳本『E.スコット著 聖書と科学のカルチャー・ウォー—概説 アメリカの「創造vs生物進化」論争』はこの論争をまとめたものです。前半では科学の方法論や生物進化論や宗教の基礎を説明しています。後半では合衆国における政教分離など憲法の規定や文獻的な教育制度を説明しています。前半については、すでに優れた翻訳[佐倉 統ほか訳、2008]がありますが、後半の政治的・社会的説明が本書の強みです。結果として本書はバランスの取れた概説書となっています。

避妊・中絶・性的マイノリティと聖書の記述

代表的な他のバイブル・イシューについても同じように、自由・平等や科学などの近代主義に対抗して、一部の保守派キリスト教徒は聖書の記述に根拠を求めています。

言うまでもなく聖書には避妊・中絶や性的マイノリティを否定するような記述があります。たとえば避妊・人工中絶に関する記述をみると、『ヨブ記』10章10～12節では、「あなたはわたしを乳のように注ぎだしチーズのように固め骨と筋を編み合わせそれに皮と肉を着せてくださった。わたしに命と恵みを約束しあなたの加護によってわたしの霊は保たれていました」と書かれています[聖書：旧約、788]。また『詩篇』139章13節では、「あなたは、わたしの内臓を造り母の胎内にわたしを組み立ててくださった」と書かれています[聖書：旧約、980]。

とくに『詩篇』139章16節では、「胎児であったわたしをあなたの目を見ておられた。わたしの日々はあなたの書にすべて記されている、まだその一日も造られないうちから」という記述[聖書：旧約、980]と併せて、「受精卵はヒト」であり、従ってその着床を阻む緊急避妊薬を禁止すべきであるという主張の根拠とされています。

また性的マイノリティに関する記述をみると、マタイによる福音書 19章4節～5節「...創造主は初めから人を男と女とにお造りになった。...それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる」と書かれています[聖書：新約、36]。『創世記』19章「ソドムの滅亡」には、住民が同性愛行為をはじめ「悪に染まった」町であるソドムとゴモラを、神が罰として業火で焼き尽くすエピソードがある[聖書：旧約、25-27]。また『レビ記』18章「いとうべき性関係」の22節では「女と寝るように男と寝てはならない。それはいとうべきことである」と書かれています[聖書：旧約、191]。

トランスジェンダーに関する記述をみると『創世記』第1章27節では、「神は御自分にかたどって人を創造された...。男と女に創造された」と書か

れています[聖書：旧約、2]。また『申命記』第22章5節「ふさわしくない服装」には、「女は男の着物を身に着けてはならない。男は女の着物を着てはならない。このようなことをする者をすべて、あなたの神、主はいとわれる」と書かれています[聖書：旧約、314]。『レビ記』18章「いとうべき性関係」においては、近親相姦、姦淫、獣姦などを禁止する記述があります。

これらの問題においても、「創造vs生物進化」論争の時代区分があてはまれます。一方で20世紀半ば過ぎまでは一部の保守派キリスト教徒がこれらのキリスト教の価値観を州法として立法化しようとした時代です。他方で20世紀末からは、彼らは最高裁判決に怯むことなく戦術を変え、少数派として信仰の自由を根拠としながら、避妊・中絶や性的マイノリティへの反対を継続する時期に入っています。そして連邦最高裁の判断はこれからです。

ほかにも、キリスト教関連では公立校における祈りの問題もあります。またキリスト教以外の宗教をみれば、ユダヤ教のコーシャ、イスラム教のスカーフや髭、シーク教徒のターバンなども、潜在的なバイブル・イシューと言えるかもしれません。

将来の見通し

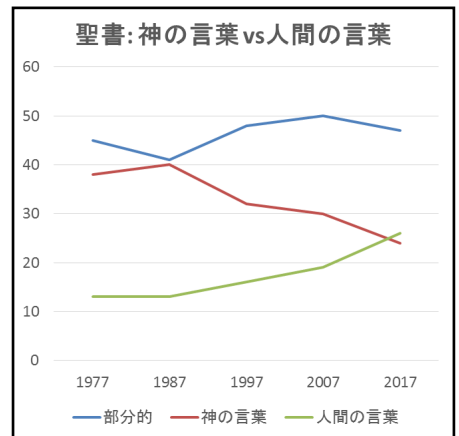
アメリカのバイブル・イシューは今後どのように推移していくのでしょうか。そもそも難しいことですが、その予測にはいくつか抑えるべき点があります。

なかでも最も重要な指標は、聖書の言葉をその言葉通りに信じる人々の割合です。右のグラフ1が示す通り、聖書の言葉を神の言葉として信じる人たちが現在でも2割を超えていることは驚きですが、その数は年々減少しています。しかもその背景には白人人口の減傾向があります。白人は国民の半数を割る2040年ころから10年前後で有権者レベルでも半数を割り、政治状況に大きな変化が起きるでしょう。つまり今から30年後くらいには、主に白人で構成される保守派キリスト教の勢力にとって、少なくとも政治的な生き残りが難しくなっているでしょう。

日本は？

さて、このようにキリスト教一極から宗教的多極化への道を模索しつつあるアメリカから見て、日本はどのように見えるのでしょうか。バイブル・イシューに光を当てることで見えてきたもう一つのアメリカと比べることで、私たち日本の宗教の在り方も姿も見えてくるかもしれません。私の上梓した翻訳本にはその可能性があるでしょう。

またこの時期日本ではクリスマス・ケーキとパーティのあとには、年越しそばと除夜の鐘、そして正月のおせちと初詣が続きます。わずか10日ほどで多神教とシンクレティズムの極みを体験します。確かに宗教的意味合いは巧みに剥がされ習慣化されていますが、この時期の私たちの行動には、恐るべき宗教パワーを感じざるを得ません。年末年始はまさに日本人の宗教観を振り返る最高の季節だと思えます。



(グラフ1：神の言葉 vs 人間の言葉)

【参考文献】

共同訳聖書実行委員会、1987、『聖書』日本聖書協会。

佐倉 統ほか訳、2008、『M.ルース著 ダーウィンとデザイン—進化に目的はあるのか?』共立出版。

鶴浦 裕、1998、『進化論を拒む人々—現代カリフォルニアの創造論運動』勁草書房。

May 15, 2017, Saad, Lydia, "Record Few Americans Believe Bible Is Literal Word of God," The Gallup Poll http://www.gallup.com/poll/210704/record-few-americans-believe-bible-literal-word-god.aspx?g_source=position2&g_medium=related&g_campaign=tiles Last accessed 7 Aug 17

<文京学院大学について>

文京学院大学は、東京都文京区、埼玉県ふじみ野市にキャンパスを置く総合大学です。外国語学部、経営学部、人間学部、保健医療技術学部、大学院に約5,000人の学生が在籍しています。本レターでは、文京学院大学で進む最先端の研究から、社会に還元すべき情報を「文京学院大学オピニオン」として提言します。

<本件に関するお問い合わせ先>

文京学院大学(学校法人文京学園 法人事務局総合企画室) 三橋、谷川
電話番号: 03-5684-4713